



N-BLOOD
NISMO Communication Magazine



NISMO Communication Magazine **N-BLOOD** 2026 / February No.109 Nissan Motorsports & Customizing Co., Ltd.

SAMPLE



N-BLOOD

NISMO Communication Magazine
2026 / February
No. **109**

nismo

Produced by Nissan Motorsports & Customizing Co., Ltd

王者の証、カーナンバー1

早くも開幕した、フォーミュラE世界選手権のシーズン12開幕戦の地、サンパウロのストリートコースを行くのはディフェンディングチャンピオンのオリバー・ローランド。予選13番手からの力走で2位表彰台を獲得。王座防衛に向けたシーズンを、幸先良くスタートした。



- 4 **SPECIAL INTERVIEW**
スペシャルインタビュー 松田次生
- 10 **FIA Formula E World Championship Season 12**
開幕戦でオリバー・ローランドが2位表彰台
- 12 **2025 SUPER GT SERIES - GT500 CLASS**
24号車が9年ぶりの勝利
- 14 **2025 SUPER GT SERIES - G300 CLASS**
56号車、惜しくもランキング2位
- 16 **2025 SUPER TAIKYU SERIES**
日産勢が3クラスにわたり奮闘
- 18 **2025 GT WORLD CHALLENGE ASIA**
TEAM 5ZIGEN、北京で総合優勝
- 20 **MOTORSPORT**
Paddock TOPICS
- 22 **CIRCUIT GUIDE**
レースウィーク充実“虎の巻”
岡山国際サーキット編
- 26 **SPECIAL IMPRESSION**
三宅淳詞×エクストレイルNISMO
- 32 **NISMO PERFORMANCE CENTER**
NPC大分がリニューアルオープン
- 36 **NISMO PRODUCT**
L型6気筒エンジン用DOHCシリンダーヘッド変換パーツキット
NISSAN GT-R用サスペンションバージョンアップキット
- 38 **NISSAN/NISMO COLLABORATION GOODS**
新しいグッズで気分を盛り上げてみませんか？
- 39 **PRESENT**
読者プレゼント

松田次生 Tsugio Matsuda

26年間という長きにわたって第一線で活躍を続け、2025年限りでSUPER GTから引退した松田次生。KONDO RACINGに移籍してからの2年間、そして、引退を決意した胸の内を聞いた。



SAMPLE

2000年のJGTCデビュー以来、積み重ねた勝利数は25。相棒ロニー・クインタレッリとともに2014年、15年とSUPER GT連覇を果たした。

長年の重任から解放された安堵感と達成感

N-BLOOD 編集部 (以下NB) : 26年間にわたるJGTC/SUPER GTでの活動を終えたわけですが、現在 (取材日は2025年12月) のお気持ちをあらためてお聞かせください。

松田次生 (以下松田) : 色々な意味で、ホッとしました。“もうやり切った”という思いもありますが、これまでは常にプレッシャーとのせめぎ合いでしたから。やはり46歳で結果を出せないと、色々な見方をされます。それに対して、ちょっと肩の荷が下りたかなという思いはあります。

NB : 第一線から退くことを決めたのは、第6戦スポーツランドSUGOが終わった後だとお聞きしました。

松田 : はい。とにかく毎年毎年が勝負で、もう本当に必死でした。KONDO RACINGに移籍した24年シーズンは、ヨコハマタイヤとチームの

基礎固めに集中し、25年シーズンは結果を出す年だと決めていました。テストもレースも必死にやってきて、それがSUGOで実った時に、安堵感とやり切った感がありました。

時間をかけてベース作りをしてきたなかで、タイヤもクルマも良くなって、どんどん自分たちのものになっていきました。名取が最終ラップで前を行くライバルを抜いた時に、“これだけのベースを作ってしまうは、若い選手でもこの先やっていける”という思いもありました。色々な意味で自分の役割は果たせたかなと。

SUGOの後にも、けっこう悩みましたけどね。“勝ったからもう1年やろうかな”とか“まだやれるんじゃないかな”とか、複雑な想いはありましたが、最終的には降りるという決断をしました。

NB : 最初にお話をされた方はどなたですか？

松田 : 最初に話したのはカミさんですかね。「もう辞めようかな」と。「やり切ったし、体力の限界だし」という話をしました。「まあ自分で決め

ればいいんじゃない」と言われましたが、収入のことや「クルマもこんなにあるのにどうするの?」とか、現実的な話も出て (笑)。ドライバーとしての報酬はそれなりにいただいていたから、まだまだ頑張らないと。

NB : 関係者の方々とは話をされましたか？

松田 : 星野さんや近藤監督も「こんなに長く、よくやったな」と言ってくれました。ロニーも「いつかはこういう時が来るし、僕もそうだったけど、いい辞め方だと思うよ。勝って辞められるなんてなかなかないしね」と言ってくれました。実際、多くの人から25勝は達成できないだろうと思われていたでしょうけれど、それをやり切れた点はとても良かったですね。本当に。色々な人に「こんなに格好いい辞め方はないね」と言われます。

NB : 名取選手の反応はどうでしたか？

松田 : びっくりしていました。「勝つたのになぜですか。それはちょっと困る」みたいな (笑)。彼には「そろそろ独り立ちしないと」という話を

しました。でも、寂しがってくるのは嬉しいことですし、それだけ頼りにされていたんだと感じました。ありがたいです。

NB : GT500を降りたことで、心境の変化はありますか？

松田 : 自分が乗っていないGT500を見た時に、寂しさを感じるかもしれません。「乗りたいな」って思っちゃうかも (笑)。でも、NISMOの監督という立場になるわけですし、色々なイベントやTV解説、クルマのYouTubeなどもやらせていただいているので、選手の時より忙しくなるとも思います。それでも、僕の根底であるクルマ好きの部分には変わりません。なにしろ、クルマを維持するためにも稼がないといけないので (笑)。持っている日産車は大事にしたいですし、売りたいくないですからね。せっかくここまで頑張ってきたクルマを買ってきたわけですし、それらは僕が日産/NISMOで戦ってきた証でもありますから。

あくまでもドライバーとして臨みレースに集中した最終戦

NB : 2025年のSUPER GT最終戦もてぎでは多くのファンが応援に来てくれました。強く印象に残ったことなどはありますか？

松田 : 「お疲れ様」という声も多かったですし、「まだ乗れますよ」とか「一生忘れません」と言ってくれる方もいました。どんなスポーツでもそうですが、惜しまれながら引退できるって、なかなかありません。皆さんから声をかけていただいて嬉しかったですね。一番印象的だったのは、NISMOブースでのトークショーですね。あれほどファンが集まってくるとは思っていなかったもので、驚きました。今まで頑張ってきて、本当に良かったと、あらためて感動しました。

NB : レースでは後半スティントを担当されました。最後に乗る時はどのような気持ちでしたか？

松田 : 乗る時はあまりそういうことを考えず、とにかく前のクルマを1台1台抜いていくことだけを考えていました。19号車を抜いて、64号車を抜いて、最後に14号車を抜いて。もう少しで3号車も抜けそうだったので、最後にゴールした後は“あと数周あったらな”と悔しさがありました。だから、感傷や複雑な想いがあつたわけではなく、最後までレースをしていた感じですね。

NB : なるほど。あくまでもレーシングドライバーとして走り、それを全うしたと。

松田 : 終わった後に、“バトル楽しかったな”とか“まだここまで走れるんだな”とは思いました。近藤監督が「速かったよ」と言ってくれたのも嬉しかったですね。

NB : 現役続行を願う声も多かったと思いますが、心は揺らぎませんでしたか？

松田 : いつかは第一線から退く時がくるわけですからね。仮に26年シーズン、もう1回GT500

に乗って、25年よりも勝てなくて、成績が悪い状態で降りると、今年勝って辞めるのでは全然違います。とにかく自分の中では格好良く終わって、記録だけでなくファンの記憶にも残りたいと思っていました。それが降りることを決めた理由のひとつですね。

レーシングドライバーの先輩であり、お仕事で一緒する機会も多い土屋圭市さんからは「落ち目になって辞めるのと、いい時に辞めるのでは全然違う。だから引き際は決めておいた方がいい」と言われていました。24年にKONDO RACINGに移籍してからはなかなか結果が残せませんでしたから、そのままフェードアウトしていくと思っていた人もいいるでしょう。でも、それだけは絶対にしなかった。

NB : 土屋さんとその話をされたのはいつ頃だったのでしょうか。

松田 : 25年の夏頃、勝つ前ですね。土屋さんも出演されているYouTube番組に呼んでいただいた時です。土屋さんは47歳で引退したので、「47歳までいければいいね」なんて話をしていたのですが、それよりも1年前倒しになってしまいました。

今のGT500は、土屋さんが乗っていた当時よりラップタイムで10秒以上速くなっていますし、僕らがデビューした当時のフォーミュラ・ニッポンに近いタイムで走っています。体力やメンタルだけでなく、目など身体的にも年齢からくる衰

えを感じていました。その衰えを、セットアップやタイヤの使い方でも補いながら走っていました。

NB : SUGOで優勝した直後の記者会見では、まだ26勝、27勝を目指したいと仰っていました。

松田 : たしかに終わった直後は高ぶっていたこともあり、“まだいける”という気持ちもありました。でも、レース翌日の夜くらいですね。どっと安堵感が押し寄せてきて“これ以上、次の目標は達成できるのかな”と感じました。

NB : 色々なタイミングが重なったということですね。

松田 : もうひとつ決め手となったのは、27年からSUPER GTのタイヤがワンメイクになることです。僕としては、タイヤをうまく開発してクルマを速く走らせるのが好きですし、それが自分の強みでもあったと思っていました。でもワンメイク化されたら、スピードだけで競う若い選手たちの戦いになってしまう。そうなったら、もう僕はそこにいる意味はないと思いましたが、今度は若手を育てる側に回った方がいいとも感じました。

道具と環境を整えてみんなでつかんだ25勝目

NB : タイヤの話が出ましたが、ヨコハマタイヤとの2年間はやはりモチベーションに繋がっていたということですね。

松田 : KONDO RACINGは24年の時点で8年

惜しまれながら引退できるって、なかなかありません 皆さんから声をかけていただいて嬉しかったです

SUPER GT最終戦のレース後に行われたグランドフィナルでは、引退セレモニーに奥様も登場。長年の活躍を労った。

